
深夜0時のバレンタイン

三亜野 雪子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深夜0時のバレンタイン

【Nコード】

N6565D

【作者名】

三亜野 雪子

【あらすじ】

「深夜0時のクリスマス」の続編です。名づけて幼馴染みシリーズ。今回はバレンタイン。二人の関係に変化が訪れます。

「こおらっ！ 大河あ！」

この寒い時期、やはりこの学校のこの2人はいつも通り。

「へっへーん！ 悔しかったら、ここまで……」

「きゃあー！」

彼、本庄大河はいつものように彼女の鞆から何かと盗んでは彼女、伊藤祐子に追いかけていた。
いつもは追いかけているうちに時間になるのだが、今回は違った。
彼女が派手に転んだのだ。

2

「祐子！」

大河は慌てて引き戻して、祐子に近付く。

「大丈夫か？」

「ばあか」

心配して近付いてきた彼の顔を両手でつねって彼女は立ち上がる。驚いている大河に思わず吹き出して、顔をゆるませた。

「ひっかかってんの」

「なっ！ 祐子!!」

舌をべーっと可愛らしく出して、祐子は教室に帰っていく。

「くそっ」

なんか、弱点握られたみたいだ。

クリスマスから1ヶ月ちょっと。彼女の態度が変わることはなく、変わったといったら自分を盾にして大河をからかうようになったことだけだ。

「結局、俺達幼馴染みから離れてないんだよな」

淋しそうに彼は呟いて溜め息をついた。

「祐子？」

「なに？ 真弓……」

戻ってきた彼女に親友である渡瀬真弓が話しかけた。じつと不思議そうに見つめている。

「顔赤くない？」

「走ったから」

相変わらずの反応に息をつきたくなったが、意識しているのはもろバレだった。

それだけでも進化だと思ふことにして、真弓は彼女の頭を叩く。

「はあ、まったく。あいつが変なこと言うから微妙な態度とつちやうじゃん」

からかいは照れのごまかしらしい。

祐子は鞆の中のお弁当を見る。あの時から欠かさずに2人分のお弁当を用意している。

これ作るのも、照れるじゃん。

クリスマスプレゼントは幼馴染みとしてあげたもの。それは彼も理解している。

けれど、どうも恥ずかしくて仕方ない。

私…… 大河のことどう思ってるんだろう？

何回か問い掛けてた。近すぎて気付かない存在、だから今まで理解してなかった。

そういう関係になり得るんだということ。

2月か……。

祐子は珍しくピンチを迎えている。同級生の女子3人と向かい合っていた。それだけならまだしもその相手は大河を好んでいる者たちなのだ。

「なに？ 話って」

「もう、本庄くんにあんな態度やめてよ！」

予想通りの展開に祐子は苦笑する。

「本庄くんが伊藤さんのこと好きなの知っててあんなことしてるんでしょ！」

「あれじゃあ、可哀相だよ！」

「好きでもないのにそんなそぶりやめてよ！」

言われてしまった。

ベットにダイブして祐子は深く溜め息をついた。本当なら適当に反論して負かすつもりだった。けれど、それができなかった。本当のことだったから。

「もう、めんどくさい」

何もかもが嫌になった彼女は大きく息をついて眠りについた。

「おーい？ 祐子」

「へっ？ な、なに？」

今日もいつものように大河が祐子の鞆を探り、追いかけるはずだった。だが、彼女は何の反応も示さない。声をかけたことでやっと気がついたようだ。

「どこか具合が悪いのか？」

「まあさか！ 気にしないで」

明らかに無理した笑顔を向けて、祐子は再び呆然と空を見上げ始めた。

なあんか……隠してる。

そう思いながらも聞くことはできず、仕方なく大河はほっつておくことにした。

「なあにぼーっとしてんのよ」

「ねえ、真弓……。私って贅沢なのかな？」

唐突な質問に真弓は驚くこともしないで、笑った。

「なにがおかしいのよ」

「いや、やあっと意識し始めたなあって思ってた」

にやにやと意地の悪い顔に祐子はムツとしてそっぽを向いた。

「まあまあ、確かに他の人から見れば贅沢かもね。幼馴染みがあんなにかっこよくてしかもあんなのこと好きだって言ってたんだからね」

言った覚えのない事実には祐子は顔を赤くして身を縮める。真弓は更に笑みを深くして小声で問う。

「で？ 祐子はどう思ってるの？」

「……………好きだって言われたとき、ドキドキしたよ。だけど、どうなんだろう？ わかんないの」

だから、悩む。

だから、戸惑う。

「あなた……………今年はあるの？」

「なにを？」

「バ・レ・ン・タ・イ・ン！」

瞬間彼女の顔は想像通り真っ赤になった。一応今まで幼馴染みとしてあげてきたチョコだが、今それに気にしている彼女は意識して渡しにくい。

「……………やめとこうかなあ」

溜め息混じりに呟く祐子に真弓は少し呆れて笑った。

だめだ、こりゃ。

2月14日。

結局、作らなかつたなあ。

祐子は一応市販の物を購入したが、それでもあまり渡す気にはなっていないかった。あまり意識してこなかっただけに、一度気付いてしまつともう元には戻れない。

「はあ……………」

ちらりと大河の方に視線を送れば、そこは女子の群れとなっていた。

「もらって！」

「義理だけど」

「本庄こついうの好きでしょ？」

みんな女友達だと前に彼が言っていたことを思い出す。けれど、そ

う思っているのは彼だけだと祐子は察していた。

ん？ それともそうじゃなくて私に誤解されたくなくて？

思うと顔が熱くなった。

チャームがなっても彼の姿は見えない。

なんだろう、胸がもやもやする。

気持ち悪い感覚に泣きそうになって彼女は顔を伏せた。

放課後。

結局大河は女子に開放されることは少なく、今日祐子と会話したのも一言二言だ。彼女は朝からの気持ち悪さはまだ引かず、次第に苛つきも加わり始めた。

「祐子」

聞き慣れた声が自分を呼んでいる。振り向きはしないで足を止めた。

「なに？」

心なしか冷たい声を発する。それをすぐに後悔しながらも、彼女は振り返りはしない。

「……………あのさ、祐子は…くれないのか？」

苛つきを察したのか、彼の言い方は固かった。祐子はすっと目を細めて口を閉じる。
もやもやが、解消できず、広がって…。

「大河…たくさんもらってるじゃん。だから、あげないっ！」

強く言い切って彼女は振り切るように走り出した。結局彼の顔は見なかった。

一体、今の言葉にどれだけ傷付いただろうか。

「……………」

校舎の裏に回ってしゃがみ込む。青空は不意に歪んで、頬に冷たい感触が伝う。

顔を伏せると地面に水滴が零れた。

「うっ……ふ」

何が哀しいのか。

何が嫌なのか。

何が苦しいのか、わからない。

ただ、どうしようもない感情に悩み、後悔と共にストレスが溜まるだけ。

「祐子」

「真弓………」

あとをつけてきたのか、彼女の前に真弓は同じくしゃがんで目線を合わせていた。

涙でくしゃくしゃの彼女に苦笑して、真弓は頭を撫でる。

「ほら、これあげるから。家でゆっくり考えな。祐子はじっと悩むより、実際に動いた方がすぐに答えが出るタイプでしょ?」

紙袋を受け取って祐子は真弓を見つめる。

「真弓い！　ありがとう!」

この日、親友という存在の大切さを彼女は知った。

『大河…たくさんもらってるじゃん。だから、あげないっ!』

祐子に言われた言葉を悶々と考え、大河は顔を歪めた。彼女の態度がおかしくなったのは2月に入ってから。だが、今日の態度は明らかに怒りを含んでいた。

もしかして…妬いたのか？

それならいいのに、とすぐにその意見を消した。ふと時計を見ると
11時。

「俺は……祐子のだけでいいのに」

ぽつりと小さく呟いた言葉は彼の部屋に響いて消えた。

「たあいが！」

何故か彼は公園にいた。後ろからかけられた聞き慣れた声に反応して振り返る。

少し強気に光る彼女の瞳、凜とした声、キリツとした輪郭はまさに彼女の性格を醸し出している。

「祐子！」

彼女はにっこりと笑う。1歩、2歩と近付いて手を出してきた。

「さつきはごめんね。あれから頑張って作ったんだ！」

出した手からポンという音をたてて、彼女は綺麗な包みに入ったチヨコレートを出した。

手品…とも思わずに大河はそれを自然と受け取る。

「頑張ったんだよお！ 食べてくれるよね？」

小首を傾げて聞く。大河はそんな彼女にドキドキして、それを受け取った。

「サンキュー！ 食べる！ 今食べる！」

包装を解いて開ければ中には一口サイズのトリュフ。祐子は自然に一つに手を延ばして、大河の口に持っていく。

「タバスコ入りだけど、美味しいよ！ はい、あーん」

行動はかなり恋人的なのに、入っているのがタバスコ。それに気付いた彼は思わず後退りする。

「な、なんてベタな！ 祐子、ちょ、待った！ やめっ」

抵抗は虚しく、彼女は大河の口に無理やりチョコレートを詰め込んだ。

甘い、味が広がる。

気付けば大河は自分の部屋のベッドに寝ていた。何度か瞬きをして、口の中にある味を確かめる。確かに甘い。

「からくない？」

「なんでチョコがからいの？」

脇から聞こえた声に驚いて彼は勢いよく顔を動かした。床に座り込み、ベッドに寄り掛かるようにして彼女は大河を見つめていた。

「え、なんで……ここに？」

「これ、渡そうと思って」

彼女が出したのは開いているチョコレートの包み。夢と同じ、一口サイズのトリュフ。

「な、んで？ くないんじゃないかったのか？」

祐子は一瞬瞳を動かして、視線を外した。

「ごめん、あれ八つ当たりしたの」

じつと大河の目を見るその瞳はどこか熱っぽい。
女っぽい姿に大河はドキリとした。

「これ、が……私の気持ち」

もう一つチョコレートを手にとって大河の口に運ぶ。

「好き」

悩んで、考えて、出した…答え。

もやもやした気持ち。イラつく心。それは女の嫉妬心から始まった。
真弓のおかげでそれに気付くことができたから。

真弓にもらったチョコレートでこのトリュフを作った。

「本当に…?」

「こんな時に嘘なんてつかないよ。それとも信じられない?」

優しく笑う彼女。今までとは違う幼馴染みの笑顔ではなく、一人の

女の顔。

「やったあ！」

「きゃあ！」

深夜0時のバレンタイン。

2人はやっと結ばれる。

「ちよ、大河！」

感激のあまり抱き付いてきた大河の重みに祐子は倒れる。結果、彼に押し倒されている状態だ。

「ねえ、ど…どいて！」

当の大河はそのことに気付いていないらしく、一向に離れようとし

ない。

顔を真っ赤にして、祐子は最終手段に入った。

「由美子さあん！！ 助けてえ！」

叫んだ瞬間、ドタドタと物音が響いた。勢いよく放たれた扉の向こうにはこの家の女将^{おかみ}、本庄由美子の姿があった。

「大河！ なに祐子ちゃん襲ってんの！」

「母さん！ いや、これはっ！」

「いいから離れなさい！」

「わあ！ 待ったあ！」

2人のやり取りを遠目で見つめて、祐子は微笑んだ。

「じつと、」

完全に2人の関係が

変わった。

(後書き)

約束通り続編です。付き合いましたよ！甘いですねえ。

バレンタインをやったらもちろんホワイトデーもやらなきゃですね！？

一カ月後を楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6565d/>

深夜0時のバレンタイン

2011年1月4日15時32分発行